

36年ぶりの誕生

環境省は4月22日、新潟県佐渡市で放鳥したトキの卵が孵化したと発表しました。

トキの卵が自然界で孵化するのは、1976年に佐渡島内で確認されて以来国内では36年ぶりであり、放鳥トキでは初めてとなります。テレビなどで報道された映像を見ると、親鳥から餌をもらうひなの姿がはっきりと確認できます。

今回ひなが誕生したのは、佐渡トキ保護センターによると、2011年に放鳥された、いままで繁殖経験のない若いペアとのことですが、ちゃんとひなの世話をしている親鳥を見て、自然の摂理、本能は凄いと改めて感じます。

ひなは普通生後40日程で飛べるようになるそうですが、何とかこのまま順調に成長して、無事に巣立ちを迎えて欲しいと願っています。

トキは、江戸時代頃は全国的に生息していたといわれていますが、乱獲によって激減してしまいます。

1908年に明治政府が「狩猟に関する規則」でトキを保護対象にしますが、その時には既に遅く、トキは絶滅寸前でした。

1952年 国の特別天然記念物に指定

1960年 国際保護鳥に選定

1967年 佐渡市（旧新穂村）にトキ保護センターを開設

1981年 佐渡に残っていた野生のトキ5羽を捕獲して、飼育下での繁殖に取り組む

このように、日本政府はもとより、佐渡市の皆さんもトキの絶滅を避けるために必死の努力をしてきましたが、2003年日本産としては最後のトキが死に、遂に日本産のトキは絶滅してしまいます。

それに先立ち、1999年に中国からつがい2羽が贈呈され、以来、人工孵化によるひなが誕生するようになり、2006年には人工孵化によるトキが100羽を超えるに至ります。これを受け、人工孵化によるトキを野生に戻すため放鳥に向けた訓練が始まります。そして、2008年に10羽のトキが初めて放鳥されました。以来今日まで、78羽が放され、ペアも15組にまで増え

ており、こうしたことが、今回のひなの誕生に繋がったと思われます。

勿論、放鳥したトキが野生化するのにはそう簡単ではありません。自然界にはカラスやテンという天敵が待ちかまえており、また、放鳥したトキは野生下での生活の経験が浅く餌を十分にとることが出来るかという懸念もあります。

今回36年ぶりにトキにひなが誕生したことは、快挙に違いありませんし、関係者の努力に敬意を表したいと思います。しかし同時に、トキは人間の営みによって絶滅に追いやられたのだ、ということをお忘れてはなりません。

地球上では、長い歴史の中で、恐竜をはじめ多くの生物が絶滅し消えていきましたが、今問題なのは、生物の絶滅のスピードが人間の様々な活動を通してどんどん加速され、生物の多様性が急速に失われつつあるということです。現在では、1年間に4万種もの生物が絶滅しているとの説もありますが、野生生物にとって最も危険な存在は、今や人間ということだと思えます。

野生生物を保護するために、IUCN（国際自然保護連合）や日本政府では、どの種が絶滅の危機にあるのか、またその原因は何か等についてアセスメントを行い、レッドリスト等として公表しています。日本政府が絶滅危惧種に指定している動物は、現在1002種ですが、10年足らずの間に300種も増えています。また、IUCN（国際自然保護連合）の資料では、人間が発見している生き物の内、ほ乳類では31.4%、鳥類では13.6%が絶滅の恐れが高いとしています。

生物の多様性が失われ、野生の生物が生きていけない地球は、人間にとっても快適な地球であるはずがありません。

一度絶滅した種を再び蘇らせることは不可能であり、また今回のように、中国産のトキを人工的に増やして野生化させることも、決して簡単な事でないことは現実がよく示しています。地球に復元力が残されている今の内に、環境保全の意義を十分理解し、官民挙げて自然保護に積極的に取り組んでいくべきです。（塾頭 吉田 洋一）